東南アジア研究　32巻1号　1994年6月

現地通信

龍牙島を望む島プヌバ

立　本　成　文*

この三日間，梅雨のように雨が降り続けている。このような雨は一週間は続くのが普通だという。紙も湿気てくる。ここマラカ海峡のリンガ諸島の小さな島，プヌバ島は今雨期である。ガイドブックにも村の宿泊所があると記されている位「有名な」所であるが，この12月6日に入村していらい旅行者はドイツ人がダボからタンジュンピナンへ行く船待ちに泊まっただけである。1988年からの宿泊者記録をみると，アメリカ，カナダ，オーストラリア，ニュージーランドは言うに及ばず，イギリス，フランス，イタリア，スペイン，オーストリア，ベルギー，ドイツ，オランダ，スイス，ノルウェー，スウェーデン，デンマークから来ている。280人の人が泊まったことになっているが，インドネシア人はその1/2である。シンガポールからは，突然91年から22人来ている。日本は延べ3人であるが，筆者が2回記帳しているので筆者以外は1名ということになる。

比較的隔離されている村としては外国人慣れしているとも言える。シャツをもらったとか，ナイフをもらったという話もよくしてくれる。いつも食事する店の横に金製品を売っている36歳の来村者がいる。土地の女性と結婚してここに定住するようになったという。たまたま筆者の着ている長袖シャツが気にいったと見え，値段を聞くので，6万ルピアと答える。彼の半袖シャツは3,000ルピアである。記念にしたいので帰る時においていけという。いや，長袖シャツはこれしかなく，日本に帰ったときに寒いので，これがなかったら死んでしまうかも知れないから駄目だと説明するが，あなたがいなくなっても日本人がここにいたという記念にするから是非おいていけという。あんたが記念をもっていても，贈り主の私が死んでしまったら，私はどうなるのだというと，ああちゃんとお祈りしてあげるという。死ぬのは神の定めた宿命とはいえ，こうまで言われると少々気分を悪くする。それでも戸別訪問の時には「お客さん」なので怒るわけにもいかない。もっとも寒さで死ぬなどというのは想像外のことかもしれない。

公称は1,000トン級の船も入港できる海深であるが，桟橋は小さな船しかつかない。それでもタンジュンピナンから週2往復定期船がかようので，先回きた1990年よりはずっと便利になったような印象をうける。もっともシンケップ島のダボが錫鉱山で大きくなる前は，このプヌバがダボ，ダエッよりにぎやかな中心地であったし，オランダが1917年から controller をここに置いていた歴史もある。実はこの宿泊所は，オランダ時代の阿片販売所であり，隣の村役場，学校の先生の住宅，現在も使っている9つの井戸も，すべてオランダの遺産である。1986年に続いて今年も全国的におこなわれる「村競べ」(Lomba Desa) の催しで州第一位となっている。86年と93年の村の報告を比べてみると，予算の数字が多くなっている以外は，殆ど同じ内容である。村競べに優勝できるのもオランダの遺産があるからだと見るのは，ひが目であろうか。

この村を選んだのは，豊富な水，清潔感といった生活条件の良さに魅せられたところが多い。こじんまりとした港で中国人とインドネシア人とが非常にうまく関係を保っているように見えたのも，もう一つの理由である。プヌバコタと呼ばれる店の並ぶ桟橋の向いにリパン島という周囲3km位の島がある。ここにオランラウトを定住させるために70戸の家ができあがったのが1982年である。63軒が残っていて，そのうち22戸には，マレー人，ブートン人，ジャワ人などが住んでいる。必ずしもオランラウトの調査のために入村したのではないが，ダエッ出身で，最近オランラウトと密接なラポールを作りあげたマレー人についてきてもらったので，どうもオランラウトを調査せざるを得なくなってしまった。一応リパン島に住む人全部の戸別訪問を終わったところである。大学院生時代にもどったような錯覚をおぼえる。今回はすべての種族から距離をおくために，村の宿泊所にと

* Narifumi Tachimoto, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

まっているとはいえ，今までのところオランラウトに集中しているため，村人もオランラウトもオランラウトの調査に来たのだと思っているようである。オランラウトとつきあっているのが筆者にとっても楽なのであるが，オランラウトの日本人というイメージが定着してしまうと，プヌバコタの方の調査がやりにくくなるのではないかと心配している。

中国人を調査対象にしたことはないが，一番最初にフィールドに入ったケダー州のアロールジャングスで，故棚瀬襄爾先生のアシスタントとして，中国人の家を一軒一軒回ったのを憶えている。何を尋ねたのかは記憶にないし，棚瀬先生がそれをまとめられたこともない。マラカ海峡の島々で，中国人のコネがあると実に楽に旅行できることは，一度中国人の知人と旅行した時に経験済みである。そのようなコネのないプヌバで，どれだけ調査できるのかやってみないとわからない。

リンガ・リアウのマレー語は，マラカ，ジョホールとならんでマレー語の中心である。しかし，ちょっとジャカルタなどに行ったマレー人の青年は，ジャカルタ・インドネシア語を使いたがる。リアウ・リンガでもマレー語は村のことばになりつつあり，町ではインドネシア語がもてはやされている。プヌバのマレー人はダエッ出身が主流であるが，バンカ，ブギス，スマトラ，ジャワの血が入りまじっている。今回の調査の主眼は，プヌバから見たマレー世界ということになろうか。立つ場所によって世界はどのように変わるのだろうか。あるいは，固定観念となってしまった世界だけしか見えないのだろうか。そのようなことをフィールドで考えてみたい。

（京都大学東南アジア研究センター教授）

カンボジアの迷走と仏教復興

林　　行　夫*

92年暮れ，悪路続きの南ラオスのセーコーンを脱出してサワンナケートへ向かう途上，乗っていた車が転覆，大破した。歩行の自由を失って数日をサワンナケートで過ごし，担架に寝たままヴィエンチャンに空輸された。精密検査ができるバンコクの病院にたどり着くまで七日間。そこで，初めて腰椎の圧迫骨折と折れた肋骨の本数を知る。腰椎の損傷部があと数パーセントにおよべば車椅子の余生だった。結局，歩き走れるようになるまで5カ月を要した。心配をかけたラオス，タイの友人からは功徳のおかげだと手紙をもらった。事故の半年前から93年7月20日出発が決定していたカンボジア調査（文部省科研費補助金国際学術研究「カンボジアの社会・文化に関する現状分析及び展望」<代表大橋久利／課題番号05041046>）に躰が間にあう。不安がないわけではない。だが，無性に嬉しい。今回は政情不安ということで調査地域もプノンペン市内及び周辺に限られ日程も短い。この条件をいいように考えて，フィールドワークのリハビリとしよう。何をおいても，すべてはこの調査から再開したい一心であった。

89年以来，わが第二の故郷タイをとりまくようにして中国西双版納，ビルマ，ラオスという上座仏教圏を訪れたが，今回の学際調査の参加はその延長線上にある。研究者の専門に応じて，プノンペン大学の教官総勢10数名がカウンターパートとして参加した。私は8月12日まで，プノンペン市内，郊外の寺院や集落で人びとの宗教活動をその生活史とともに聴き取った。儀礼については，入安居（*col watsa*）はもちろん，それに先立って市内・郊外のいたるところで行なわれた結婚式や新・改築儀礼を観察する機会を得た。また，仏教サンガの臨時集会にまったく偶然に参加することができたのも，たいへん幸運だった。

数年前に，タイ側から国境を超えて眺めた国のひとつである。正面玄関からみたカンボジアの風景，臭い，色合いはやはり違う。空港から市内へ行く途上，なぜかヤンゴンと似た印象をもった。ただ，プノンペン市内の人びとの表情はずっと明

* Yukio Hayashi, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University